

Do・Check			Action	
重点目標	指標(取組指標・成果指標)	達成度	達成状況についての説明	学校・園の現状・実態
一人一人の学力向上 ～基礎基本の定着とじっくり考える授業の構築～	年間2回の公開授業を全クラスで取り組む。	B	本年度新規に立ち上げたチャレンジタイム、スキルアップ研修の実施にあった手、回を重ねることを通して、軌道に乗せることができた。チャレンジタイムに関しては、1月までに、延べ595名の地域・保護者の皆様方のサポートと担任以外の職員も146名が関わり、子どもたちの学びに対する意欲と達成感、さらに、感謝の気持ちを高めることができた。 教員のスキルアップ研修は、毎月実施することはできなかったが、それぞれがもつ教育技術の伝達・共有化を図る研修を通して、若手教員の人材育成にもつながった。 高学年の分割授業については、指導方法工夫改善の教員と連携した交流給食にとどまらず、全学年がかがやき学級との「ふれあい集会」を実施し、自己のよさを伝え合ったり、コミュニケーションの幅を広げたり、互いに理解を深め合ったりすることができた。 地域や保護者の皆さまが学校においていただく機会を増やすこと(チャレンジタイムなど)により、支えていただいていることへの感謝の気持ちが高まっている。 道徳の全研授業を2年生で実施するとともに、「考える道徳」を如何に進めていくかについての公開授業も3年生で実施した。年間35時間の道徳を完全実施することを通して、子ども自らが自己の有り様を見直し、いじめゼロへとつながっている。	どの学年も落ち着いた生活態度が見られ、授業への集中も意欲的な姿もあり、学校全体としては、伸び伸びと笑顔で過ごす子どもたちに安定感がある。 特に、今年度の重点目標としてあげている「多様な学び」については、学年・学級をこえて、さりげなく、やさしい、思いやりのある行動や関わり方が随所に見られるようになり、よい結果が得られていると感じている。 国語科の授業研究を継続し、「主体的に読み進める力を育てる国語科学習指導～考えを高め合う活動の工夫を通して～」をテーマに掲げ、教師も自己の指導力を高め、子どもたちのよりよい姿を目指して、熱心に授業改善へ取り組んでいる。 しかし、学力テストや定着度調査の結果を比較すると、国語は常に福岡市の平均を上回っているのに対し、算数に陰りが見られ、児童の実態として二極化がある。特に高学年は、40人学級の2クラスとなるため、個別の支援を必要とする児童が増えることが想定される。 福岡市の施策として発表された3・4年生を対象とする「放課後補充学習」とチャレンジタイムの位置づけをどのように図っていくかを見直し、検討していく必要がある。
	放課後の学びチャレンジタイムを年間15回以上実施する。	A		
	授業力向上のためのスキルアップ研修を毎月実施する。	C		
	高学年算数の授業を分割で行い学習内容の定着を図る。	A		
多様な学び ～温かいつながりと寛容の心を育てる～	かがやき学級や他学年との交流給食を実施する。	A	どの学年も落ち着いた生活態度が見られ、授業への集中も意欲的な姿もあり、学校全体としては、伸び伸びと笑顔で過ごす子どもたちに安定感がある。 特に、今年度の重点目標としてあげている「多様な学び」については、学年・学級をこえて、さりげなく、やさしい、思いやりのある行動や関わり方が随所に見られるようになり、よい結果が得られていると感じている。 国語科の授業研究を継続し、「主体的に読み進める力を育てる国語科学習指導～考えを高め合う活動の工夫を通して～」をテーマに掲げ、教師も自己の指導力を高め、子どもたちのよりよい姿を目指して、熱心に授業改善へ取り組んでいる。 しかし、学力テストや定着度調査の結果を比較すると、国語は常に福岡市の平均を上回っているのに対し、算数に陰りが見られ、児童の実態として二極化がある。特に高学年は、40人学級の2クラスとなるため、個別の支援を必要とする児童が増えることが想定される。 福岡市の施策として発表された3・4年生を対象とする「放課後補充学習」とチャレンジタイムの位置づけをどのように図っていくかを見直し、検討していく必要がある。	どの学年も落ち着いた生活態度が見られ、授業への集中も意欲的な姿もあり、学校全体としては、伸び伸びと笑顔で過ごす子どもたちに安定感がある。 特に、今年度の重点目標としてあげている「多様な学び」については、学年・学級をこえて、さりげなく、やさしい、思いやりのある行動や関わり方が随所に見られるようになり、よい結果が得られていると感じている。 国語科の授業研究を継続し、「主体的に読み進める力を育てる国語科学習指導～考えを高め合う活動の工夫を通して～」をテーマに掲げ、教師も自己の指導力を高め、子どもたちのよりよい姿を目指して、熱心に授業改善へ取り組んでいる。 しかし、学力テストや定着度調査の結果を比較すると、国語は常に福岡市の平均を上回っているのに対し、算数に陰りが見られ、児童の実態として二極化がある。特に高学年は、40人学級の2クラスとなるため、個別の支援を必要とする児童が増えることが想定される。 福岡市の施策として発表された3・4年生を対象とする「放課後補充学習」とチャレンジタイムの位置づけをどのように図っていくかを見直し、検討していく必要がある。
	学びに関わるサポーター、GTへの感謝の気持ちを言葉で表すよう全学級で徹底する。	B		
	全学年で考える道徳を実施し、いじめゼロにつなぐ。	A		
	毎月実施する生活アンケートから様々な兆候を読み取り、見逃さない生徒指導を実施する。	A		
望ましい人間関係づくり ～規範意識と自己有用感を高める～	Q-Uテストを2回実施し、自尊感情・規範意識の肯定的回答を高める。	B	前期と後期に実施したQ-Uテストの比較により、配慮を要する児童や個別に指導・支援を手厚くする児童を担当が把握することができ、改善に努めることが出来た。 縦割りグループによる活動は、清掃活動や集会活動を通して、望ましい姿一自己の役割をそれぞれが自覚した上で責任を果たし、互いを思いやる行動を取ることができる一を実現することが出来ていた。 学校公開週間に参観された地域・保護者の方々からいただいたアンケートの結果から、「自分からあいさつをしている」についての肯定的評価は78%であり、子どもたちの自己評価も最終段階2月6年生の72%が「よくできた」と答えている。	算数科における学力の向上を図る。 チャレンジタイムの在り方、特に高学年の個別指導を見直し、改善を図る。 算数科の授業研究を行う。
	縦割りグループによる活動の自己評価(役割・責任・達成感)を実施する。	A		
	地域が認める①あいさつ②返事③素直な反省ができているか、学校公開週間でアンケートを実施する。	B		
	4つの「り」を浸透させ、役割の気づきから自分発見までのサイクルを実現できる活動を各学年が工夫して取り組む。	A		
学校関係者評価についての説明(評価委員からの意見・要望・改善に向けた提言等)				
○ 学校と地域の教育方針がつながり、子ども達がよくあいさつをしてくれ育っている。○ 毎年、重点目標やテーマを決めて教育活動に取り組んでいる姿勢が子ども達によく反映されている。○ 挨拶も以前よりよくなり、総合的によくできた学校である。○ 教育方針の「4つのり」は、大人にも子どもにも分かりやすくとてもよいと感じる。○ 新規に取り組んだチャレンジタイムに来られたボランティアの方々は、「元気をもらった！」と言って帰られている。地域も学校もお互いに活性化されるよい取組だと思う。○ 多忙な日々の中、先生方が授業のスキルアップ研修に取り組んであることが素晴らしいと思う。全職員で子どもを育てていることがよく分かった。教師の笑顔が何より大切である。○ 算数は学力の基礎であるから、最低限の四則計算はしっかりと小学校の間に身に付けられるようにしてほしい。○ 保護者がもっと積極的に学校教育へかかわりを持つよう今後も様々な工夫をこらして進めてほしい。				
自己指導力の向上				教師の人権感覚を高める研修の実施と体罰によらない指導、いじめゼロの実現に向けた教育活動を充実させる。 日常の学校生活における様々な場面で、自己選択や自己決定の機会を増やしていく。